山路越えて

高見顕治

送別旅行　404

Suzaowa Nishimura, 1903　GOLDEN HILL　Aaron Chapin, 1805

♪=100　やまじーこーえて　ーひとりーゆけど　ー主

のてーにすがれーるみはやーすーけしー　アーメン

詩 91・11

1

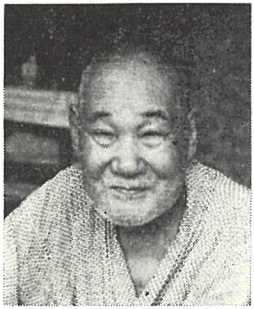
人は「事実」の周辺に近づき、あれこれと論ずることは容易にできるけれども「事実そのもの」をつかむことは兎角むずかしいものである。ところで私は私自身の身近な、些細な一例として、讃美歌「山路超えて」（旧版四〇九番、新版四〇四番）の「山路」は何処であるかということについて「事実」を知ることが簡単でないことを最近経験した。

讃美歌「山路こえて」の作詞者は四国松山の西村清雄である。西村清雄は一八七一年（明治四年）二月十三日生、今年九十三才で、一九六二年（昭和三十七年）四月十三日に松山市名誉市民の称号をあたえられた。一八八一年頃（明治十四年、十二才）松山にあった天主教会に通い、ここで受洗。松山第一中学に在学中、学制改革により中学校が廃止され勉強の道をたたれた。西村家には清雄の祖父に清臣（きよみ）というすぐれた歌人があり、母方の祖父は伊佐庭如矢という漢学者で書道家、且つ明治初年、松山城が廃毀されようとするやこれを概いて当局を説き、これが保存策を講じた。初代道後町長として今日の道後温泉発展の基礎を確立し、又家塾を開いて従学の徒千余人に及んだといわれた人である。しかし、西村清雄の家は、当時、家運傾き最も苦境にあったが好学の志止みがたく、且つ天主教で受洗した清雄の信仰は京都の同志社に赴かせた。ここでは新島襄先生に直接教へを受ける機会もなく、数ヵ月にして同志社を退き、一時大阪の宮川経輝牧師のもとで働き、且つ英語の勉強をした。ここで信仰の基礎をかため伝道に向うか、教育に向うか思いなやんだ時、宮川牧師に小学校教育の重大性を説かれ、意を決して松山に帰り小学校教師をつとめた。

一八九一年（明治二十四年）アメリカ婦人宣教師コーネリオ・ジャドソン女史が松山夜学校教育を設立、小学校教育も満足にうけていない貧民の子女教育を始めるやこれに参画

し、爾来、六十余年この事業にたずさわった。（夜学校は現在城南高等学校となっている）その間一八八六年（明治十九年）既に立てられていた松山女学校（現在の東雲高等学校）の校長にジャドソン女史が就任するやこれが片腕となり、女子教育に尽した功も少からぬものがある。

さて私の身辺のことというわけは西村清雄の亡妻は私の母の妹で、私の実の叔母にあたる。私の郷里は岡山県高梁の近くで、私の母方の祖父はお寺の出身であった。高梁には早くヤソ教が這入り、迫害も激しかったところである。故留岡幸助の如きは、ヤソ教になったため養父にしばられて天井裏につるされているのを、隣の人にこっそり救出され、今治へ逃げて行った人である。



西村清雄翁

さて高梁には順正高等女学校というヤソ教主義の女学校が早くからあり、伊吹岩五郎（同志社出身）という人が長くその校長であった。私の叔母はこの順正高女の初期の卒業生で、早くヤソ教に入信した。私の祖父は大変立腹して、百方手をつくして叔母にヤソ教をすてさせようとした。彼女は、多分、岩五郎の紹介で松山に行き、西村清雄の企てていた夜学校設立、勤労青年、子女の宗教的教育に協力することになった。

叔母は一八九八年（明治三十年）に西村清雄と結婚した。丁度日清戦争から日露戦争の始まる頃まで約六年間、叔母は私の祖父から勘当されていた。叔母がヤソ教に入り松山に赴き、西村清雄と結婚するに至るまで、又、勘当されている間も、私の父母（ヤソ教信者ではなかった）が叔母の唯一の味方になっていた。このため叔母は勿論叔父も私の父母に対しては最も深い恩義を感じて来たようである。したがって私にとっても叔父は単なる義理の叔父ではなく、特別の感情をもっているのである。

2

「よく見ききして知っていることは軽蔑を生ずる」という諺のごとく叔父の作詞である「山路こえて」については、最近まで私にはあまり関心はなかったのである。ただキリスト教の葬式に参列するとしばしば故人愛唱歌として「山路こえて」が歌われる時に叔父を思い出す程度で、この歌がいつどこでどんな情況のもとで着想、作詞されたかなどについては、かって私自ら考えたことはなかった。

ところが一昨年のこと名古屋在住の友人好川増輔氏は、私が「山路こえて」の作詞者にゆかりの者であることをきつけて、同氏から「……昨年矢内原忠雄氏と雑談の際、『山路越えて』の歌詞は作詞者が僕と同県人で実際に山を越えて行く時の体験を詠じたもので、実によく出来ておると言われましたが、作詞者の名と峠の名、作詞の年代など知らせて下さい」との端書をもらった。

一九五〇年十一月一日、日本キリスト教協議会文書部集発行の「愛唱讃美歌百選」の五六頁に「山路越えて」がのせられ、且つその「註」には「宇和島伝道の帰途、鳥坂峠にさしかかった時、日は既に西山に傾き、山には残雪が輝き……」とある。

これはおそらく叔父がまだ若い頃のはっきりした記憶あるいは当時の日記などをもとに

して何かの雑誌に発表したものがもとになっていると思われる。しかも歌碑は法華津峠（一九五五年八月十八日建碑）にあるから好川氏も疑問をもたれたのであろう。

燈台下暗しで今までぼんやりしていた私も、始めて石についてできるだけ明確なことを好川氏に返事したいと思って、一応作詞者の叔父に色々と問いただした。

その返事によると

一、「山路こえて」作詞者西村清雄、生年月日は一八七一年（明治四年二月十三日）

二、「山路こえて」の作詞年月日不詳。

三、「山路」は法華津峠にして鳥坂峠にあらず。

以上のような返事が来た。

なお作詞当時の心境については、私の家内が私と結婚して間のない頃（三十五六年前）叔父が上京して私の家に滞在中、家内は初対面の叔父があの「山路こえて」の作詞者であると言うので大変好奇心をいだいて、叔父にあの歌が出来た時の心境を聞いたらしく、家内の話によると「……ありゃあ人生行路を象徴するようなものじゃあない。あの山路をこえる時はその辺が追剝強盗の出るという恐ろしいところじゃったので、恐怖がいっぱいで知っている讃美歌を大声に歌って恐怖心をまぎらして歩いて行ったもんじゃ。恐怖のあまり出て来た歌じゃ、と言って叔父様はからから笑われた。」と言っている。

また、松山と宇和島との距離について、今は国鉄なら急行で三時間、当時徒歩で「二晩がかりで歩くより他に方法はない……」（法華津峠に「山路こえて」の歌碑が建てられた当時の朝日新聞の記事による）と、好川氏には右のようなことを返事した。

好川氏は一九六三年二月十五日発行「東京独立新聞」に、私の返事を基礎にして「矢内原先生と山路こえて」と題して詳細に記述されていた。好川氏が「山路こえて」に対してかくまで熱意を持って紹介されたことを叔父のために喜び且つ感謝して、この新聞を早速叔父に送った。その時かねて疑問に思っていたことが一二浮んで来た。

一、松山宇和島間の道程について「二晩がかり」と言う朝日新聞の言葉があいまいな表現で、言葉通り正直に解すると二泊三日かかることになるが、そうはかからないのではないかと言う疑問。

二、「山路」は法華津峠でなくて「鳥坂峠」ではないかと言う疑問。

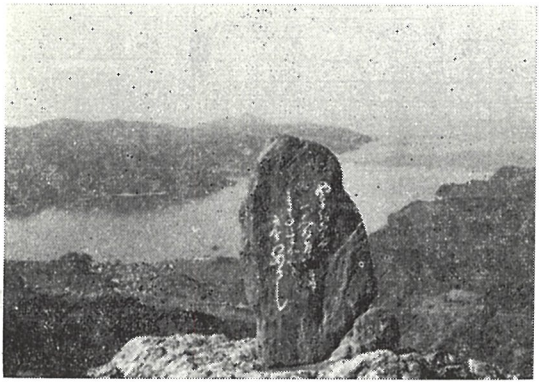
そこでこれらの点をもう一度叔父にただした。しかし叔父はもはや右については記憶があいまいなので、私の義兄渡部保次郎（松山東雲高校財務理事、伊予鉄取締役）から西村清雄に代り次のような返事があった。

一、山路をこえた月日は「峯の雪」と詠んでいることから見て晩冬と見て然るべく。

二、明治三十六年頃松山宇和島間を往復する道筋の概略は松山―（犬寄峠）―中山―内子―大洲―（鳥坂峠）―卯之町―（法華津峠）―（宇和）吉田―宇和島で、その間一泊二日を要し、松山から宇和島へ行く時は鳥坂峠をこして卯之町泊り、宇和島から帰る時は吉田、法華津峠、卯之町を経て鳥坂峠をこえ大洲泊りが普通。西村清雄は宇和島からの帰途鳥坂峠で日没、大洲で一泊して帰松。鳥坂峠をこえる頃「山路こえて」を発想文句を口ずさみつつ大洲で筆に書きとめたか、あるいは推稿して松山で完成したかも知れない。大洲では友人の朝山加寿百宅に多分泊った。

それで法華津峠に「山路こえて」の歌碑を

立てたのはおかしいと言えなくもないが、鳥坂峠も法華津峠も一連の山道であり且つ作詞者は法華津峠も通ったのであり、法華津峠は今日バスの通路であって、その景色もすばらしく多くの人に親しまれる点を考えて、人も通らない鳥坂峠よりも法華津峠の方が選ばれたものである。「山路」が鳥坂峠であることは作詞者自身から渡部保次郎も度々聞いた。



法華津峠の歌碑

三、「山路こえて」が作られた当時の心境については、山路こえた明治三十六年当時はもはや追剝など出る筈はなかったが、淋しかったことは事実で、その誇張であると思えばよろしかるべく、勿論今でも鳥坂峠は昼でも人に会うことはまれで、道は狭く夜ともなれば樹木が天を覆うてまっ暗である。

右のような返事が義兄渡部保次郎より来たので、「山路」は法華津峠でなくて鳥坂峠であることなど訂正しなくてはならない。

実際、陸地測量部の地図で見ると松山・宇和島間について、宇和島から松山へ帰る場合は法華津峠は正午頃通過することになり、卯之町を経て鳥坂峠を越える時が日が西に傾く頃にあたる。

3

私は八月下旬松山を訪れた際、法華津峠と鳥坂峠とを実地に見たいと思い、その地に赴いた。まずこの辺の地形を概観すると、国鉄駅のある卯之町を中心にして南北に細長い平野で豊かな米の産地である。卯之町から南四キロの辺に法華津峠があり、北十キロのところに鳥坂峠がある。卯之町中心の平野全体が標高約二百米の高地であるから卯之町から峠を登るのは距離が短かい。

しかし、外から卯之町へ這入るには相当に長い坂である。この地方は雪が多いとは運転手の話であった。往時、南は法華津峠をこえて宇和、吉田、宇和島へ、北は鳥坂峠をこえて大州、松山へ到る街道であった。

現在、法華津峠はバスの通る大道であるが、鳥坂峠は登口のところからバス道路はその裾を東に曲り北方の大州に向っている。

私は八月十八日夕刻卯之町に着き、ここで一泊して翌十九日朝、自動車でまず法華津峠へ赴いた。「山路こえて」の歌碑の立っているところは法華津湾を眼下に見おろし、雲煙の彼方には遠く九州をのぞみ、聞しにまさる絶景である。作詞者は六十年前に宇和島を発し宇和、吉田を過ぎ長い坂を登り、この絶景をしがめつつ法華津峠を越えて北に下って卯之町に到り、さらに平坦な街道を歩いて北へ進むこと二里半、鳥坂峠へ登って行ったものであろう。

さて私は鳥坂峠登口辺まで自動車で走り、然るべきところで自動車をすててその辺の百

姓に鳥坂峠を聞いて登って行った。

この峠はこの附近の人が知るのみで卯之町で聞いてもほとんどその名を知る人はなかった。登り道は約八町でさほど急坂ではない。私の登って行ったのは朝九時半頃であった。往時の街道も夏草がおいしげり、靴は露ですっかりぬれた。渓流の音も聞こえて来た。松のあらしは聞えなかったけれど一度出合った草刈農夫の話ではこの辺一帯に大きな松の樹があったが、戦争の時切り倒されてしまった、しかし、峠には旧街道の名残りの老松が二三本天にそびえたち、暑い日光の直射をさえぎる程度に雑木が生い茂っていた。また大きな巌も樹木の間にそびえていた。玉の汗をぬぐいつつゆっくり、登って約三十分程で峠に着いた。峠には小さな地蔵様が鎮座していた。一方にはかなり大きい杉の林があって、うっそうとして矢張り昼なお暗しの感を与えた。ここから、やや東北に向うて相変らず夏草茫々の旧街道を下って行くのであった。遥かに大洲の方をながめると、途なお遥かなる感が深かった。讃美歌の「松の嵐、谷の流れ……。道けわしく、行くて遠し、志ざす方にいつかつくらん。されども主よ、われいのらじ旅路の終りの近かれとは。日も暮れなば石のまくら、かりねの夢にもみくにしのばん」と言う文句を私は作詞者の詩的表現に過ぎないと今まで思っていた。旧約聖書のヤコブの夢の連想などあることは勿論であるけれど、冬期には雪が多いと言われる現地を見、谷川の音を聞き、老松を仰ぎ、大きな巌石を目の前にした時、また峠を越えて更に行くての遠いことをながめた時に、あの歌の文句は大体に於て作詞者の実感が出ていることを始めて知った。また峠が恐ろしかったと言う作詞者の述懐もたとえ六十年前の街道であったとしても今の状況から察すると、必ずしも誇張とは言い切れないように思った。

4

この歌が讃美歌の中に加えられたのは一九〇三年（明治三十六年）発行の讃美歌の主査編集委員であった故三輪源造氏があずかって力があった。三輪源造氏は同志社を卒業して松山女学校の国文の教師をしたことがあり、西村清雄とは極めて親しい間柄であった。今度叔父を見舞った時に三輪源造氏に対する記憶は極めて明瞭であった。その時、私の質問に答えて叔父は「もとより自分は何の意図もなく、あの歌を作り、三輪源造君に見せたら、当時讃美歌編集委員であったので、これは使い物になると思ったか三輪君が取上げたものじゃ。勿論文句には三輪君が相当手を入れたものだろう」と語っていた。

なお一九六三年八月号「みぎわ」の二八頁には「山路こえて」の讃美歌をのせ、鳥坂峠と題して解説の最後に「国鉄卯之町（うのまち）駅からバスで約二十分。東北方約四キロの地点。脚下には宇和の海をへだてて、晴れた日には九州が望まれる」とあり、かかげられたグラビアは卯之町南方にあって法華津湾を脚下に見下ろし遥に九州を望む法華津峠である。

身近なこととは言え西村清雄が鳥坂峠を越えたのは六十年前のことであり、かりに記憶が確かであるとしても六十年前のことは明確な記録でも無い限り霞の向うのことのようにおぼろである。

叔父は戦災に遭い過去の記録など一物も残さないし、齢は九十三才でほとんど記憶は喪失しているので、作者その人にこれらの最後的決定を求めるよしもない。

（元東大教授）